Clinostomum sp. 寄生の1例

坂本喜久雄・篠島祥一・渡辺義介
並川有隣・水野明夫・茂木克俊
佐野基人*・吉村敬三**

A case of *Clinostomum* sp.

Kikuo SAKAMOTO・Shoichi SASAJIMA・Yoshisuke WATANABE
Arichika NAMIKAWA・Akio MIZUNO・Katsutoshi MOTEGI
Motohito SANO*・Keizo YOSHIMURA**

I. 結 言

今回、われわれは、口腔症状を呈した *Clinostomum* 属幼虫の中咽頭への寄生例を経験したので報告する。

II. 症 例

患 者：53歳 男性。

初 診：昭和54年12月■日。

主 訴：右側口腔の異和感。

家族歴：特記すべき事項はない。

既往歴：23歳時、虫垂切除術。53歳時に肺癌により肺切除手術を受けた。また、51歳時より高血圧症の治療を受けているという。

現病歴：当科初診の約10日前に、魚を生食したのち、口腔に搔痒感を覚えた。放置していたが、6日前より、えんげ時に右側口腔の異和感が増強するようになった。その後、症状が軽快しないため、本院第1外科を受診し、歯科口腔外科へ紹介された。

浜松医科大学歯科口腔外科
(主任：茂木克俊教授)

* 浜松医科大学寄生虫学教室
(主任：佐野基人教授)

** 浜松医科大学第1外科学教室
(主任：吉村敬三教授)
Department of Oral Surgery (Chief: Prof. Katsutoshi Motegi)

* Department of Parasitology, Hamamatsu University School of Medicine (Chief: Prof. Motohito Sano)

** The First Department of Surgery Hamamatsu University School of Medicine (Chief: Prof. Keizo Yoshimura)

受付日：昭和57年4月23日

写真1 矢印は、右側中咽頭上方で蠢動する虫体様異物

現 症：口腔内は異常なく、写真1のごとく、右側中咽頭上方後壁の粘膜に、一端を挿入して、蠢動している長さ約3mmの黒色の虫体様異物を認めた。虫体様異物の周囲粘膜には、発赤などの異常所見を認めなかった。

臨床検査：表1のとおり、 γ -GTPが高値であった他は、異常がなかった。なお白血球像においても、好酸球の増加を認めなかった。

処置および経過：ただちに虫体様異物を、ピンセットでつまみ取った。写真2は、摘出虫体である。虫体摘出直後から、右側中咽頭後壁の異和感は、完全に消失したという。

また、2か月経過した後も、同部に何ら異常を認めないという。

III. 摘出虫体所見

鏡検所見：まずカルミン液で染め、バルサムで封入した。写真3のように、虫体の大きさは、体長4.70mm、体幅が2.0mmであった。

表 1 臨床検査成績

血液一般検査		血液生化学検査	
赤血球数	495×10 ⁴ /mm ³	総蛋白	7.1 g/dl
白血球数	6,300/mm ³	A/G	1.5
好塩基球	0%	アルブミン	4.3 g/dl
好酸球	1%	GPT	7単位
桿状核	22%	GOT	19単位
分葉核	43%	LDH	338単位
リンパ球	30%	γ-GTP	112単位
単球	5%	ALP	6.9単位
血色素量	15.4 g/dl	BUN	13.8 mg/dl
ヘマトクリット値	48.9%	Na	137 mEq/l
血小板数	23.8×10 ³ /mm ³	K	4.3 mEq/l
赤沈(平均値)	27 mm/h	Cl	100 mEq/l
尿検査		Ca	4.3 mg/dl
糖	(-)	P	3.6 mg/dl
蛋白質	(-)		
ケトン体	(-)		
潜血	(-)		
pH	7		

虫体の一方に長径 0.38 mm, 短径 0.35 mm の口吸盤をもち、それに続いて、長径 0.76 mm, 短径 0.67 mm の腹吸盤をもっていた。また、体前端腹側に collar (襟) を有し、体中央部に生殖孔を有していた。子宮内には、虫卵を認めなかった。

同定は、*Clinostomum* sp. (sp. は種未定の略) の幼虫とするのが正しいと考えた。

IV. 考 察

寄生虫性疾患は、口腔外科領域では、非常にまれな疾患で、最近では、Lim³⁾, Erfan²⁾らが Oral myiasis (口腔蠅蛆症) の症例を報告している程度である。

人の寄生虫性咽喉炎は、従来 Halzoum とよばれ、中東地方では動物に寄生する肝蛭によって生ずる咽喉炎として知られている³⁾。その症状は、寄生する虫の種類や数によって異なるが、一般的にはえんげ、呼吸および発声障害と咳嗽とを伴う。また、ときには涙腺や鼻腔にも障害が起こるといわれている³⁾。

本邦では、Yamashita⁴⁾, Kamo ら⁵⁾の *Clinostomum* 属による人の咽喉寄生の報告があり、淡水魚を生食することによって感染するとされている。

Clinostomum には 45 種類あることがすでに知られ、その生活史が明らかにされているものは 6 種類におよんでいる⁶⁾。そのうち、日本において人体寄生が認められた種類は、*Clinostomum complanatum* の 1 種類である⁴⁾。

写真 2 摘出した虫体

写真 3 *Clinostomum* 幼虫の光顕像 (背面)

今回、検出された *Clinostomum* 属は、本来は鳥類の咽喉頭に寄生する小吸虫である³⁾。本症例は、本邦において *Clinostomum* sp. の幼虫による人体寄生の第 3 例になる³⁾。

臨床症状の消失が早かったことは、寄生虫が小吸虫で、幼虫 1 虫の寄生であり、寄生が短期間だったためと考える。

また臨床検査において、一般に寄生虫症では、好酸球増多が発現するといわれている⁷⁾が、本症例では、好酸球の増多は認めなかった。このことも、寄生が短期間であったためと考えられる。虫体摘出後、ただちに症状が消失し、以後 2 か月経過するも何ら症状の再発がないことから、今回の症例は、本虫の寄生が原因して起こったものと考えられる。

V. 結 論

われわれは、口腔症状を呈した中咽頭寄生 *Clinostomum* sp. 1例を経験したので、その概要を報告した。

なお、本論文は、寄生虫学的所見を主にしてすでに報告してある¹⁾が、今回は臨床所見に重点をおいて発表した。

引用文献

- 1) Lim, S.T.: Oral myiasis: A review. Singapore Dent J 13: 33 1974.
- 2) Erfan, F.: Gingival myiasis caused by Diptera

(Sacophaga). Oral Surg 49: 148 1980.

- 3) 佐野基人, 茂木克俊, 竜谷俊也: *Clinostomum* sp. の咽頭寄生による興味ある1症例について. 耳嚔 52: 1037 1980.
- 4) Yamashita, J.: *Clinostomum complanatum*, a trematode parasite new to man. Annot Zool Japon 17: 563 1938.
- 5) Kamo, H., Ogino, K., Hatsushika, R.: A unique infection of man with *Clinostomum* sp.; a small trematode causing acute laryngitis. Yonago Acuta Med 6: 37 1962.
- 6) Yamaguchi, S.: Asynoptical review of life histories of digestic trematodes of vertebrates. Keigaku Pull, Tokyo, 1975, p 304.
- 7) 寺田秀夫: 白血球数. 総合臨床 27: 2193 1978.